

文学テキストの原文とそのリトールド版の比較
に基づいたフォーカス・オン・フォーム

小野 章

英語英文學研究 第59巻（2015年3月）別刷

HIROSHIMA STUDIES
IN ENGLISH LANGUAGE AND LITERATURE

広島大学英文学会

文学テキストの原文とそのリトールド版の比較

に基づいたフォーカス・オン・フォーム

小野 章

1 背景と目的

英語教育現場で文学が敬遠されるようになって久しい。主な理由のひとつに、文学テキストは難解であるというものが挙げられる¹。

文学の難解さを逆手に取って言語学習に役立てることも考えられる。というのも、第二言語習得論では Focus on Form (以下, F on F) が言語学習に効果的であると言われているからである²。第二言語習得の過程を図示すると次のようになる³。

Input → Intake → Developing System → Output

図1 第二言語習得の過程

習得過程の第一段階にある Input は「学習者がさらされる言語そのもの」(‘the language the learner is exposed to’⁴) である。Input はいわば「生のままのデータ」(‘raw data’⁵) であり、そのデータから学習者は「意味内容」(meaning) を取り出そうとする。その過程で学習者は「言語形式」(form) にも関心を払い、それを作動記憶へと取り込んでいく。これが Intake である。よって、言語形式を焦点化する F on F は、言語習得の一過程である Intake と密接に関わって

¹『英語教育』(1998年, 5月号)の「教科書にみる文学作品の変遷史」(江利川春雄)は、日本の英語教育界における文学の不人気と、その理由のひとつとしての難解さを指摘している。同指摘から約20年が経とうとしている現在も、日本の英語教育界における文学の扱いはほとんど変わっていない(か、むしろ悪化している)と筆者は認識している。

²本論が研究対象とする日本人英語学習者にとって、英語は第二言語ではなく外国語である。しかし、本論では外国語習得が第二言語習得に含まれるものとする。

³James F. Lee and Bill VanPatten, *Making Communicative Language Teaching Happen* (New York: McGraw-Hill, 2003), p.133.

⁴*Ibid.*, p.31.

⁵*Ibid.*, p.133.

いる⁶。なお、言語形式とは表現そのもののことであり、その表現によって伝えられる意味内容と対概念を成す。言語形式を焦点化するひとつの方法として、有標の言語を使用することが考えられる。無標の言語の場合、われわれの注意は言語形式を意識することなく意味内容へと向かう。それに対し、有標の言語の場合、われわれの意識は多少なりとも言語形式へと向けられる。逸脱的表現を含む文学は有標であり、ゆえにわれわれの注意は言語形式に比較的向かい易くなることが想定される。

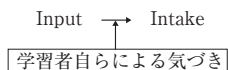
習得過程の第二段階である Intake において、難解な文学の使用は学習者の注意を言語形式に効果的に向けることになるかもしれない。しかし、難解な文学の場合、Intake の前提である Input にそもそも問題を抱え込む可能性がある。Input に関し、Lee and VanPatten (2003) は次のように述べている。

There are several general characteristics of input that make it potentially useful to the learner. First, it has to be *comprehensible*. This is perhaps the most important characteristic of input from the learner's point of view. . . . *The learner must be able to understand most of what the speaker (or writer) is saying if acquisition is to happen.*⁷

Input は学習者にとって「大部分」(‘most of what the speaker (or writer) is saying’) が「理解可能な」(‘comprehensible’) なものである必要がある。第二言語習得の過程では、スムーズな意味理解が大前提とされているのだ。難解な文学は言語形式に学習者の注意を引きつけるかもしれない。しかし、その難解さゆえに学習者が意味内容の理解にそもそも困難を覚えるようであれば、文学は言語習得には不向きな教材とみなされかねない。

文学の「難解さ」とは何であろうか。例えば *The Canterbury Tales* は中英語で書かれており、ゆえに現在の英語学習者には難解なテキストとなろう。比較的新しい作家によるものであっても、使用頻度数の少ない語彙や複雑な文構造を駆

⁶ 教育現場において学習者の F on F を促す方法として、教師の介入が考えられる。しかし、後述するように、本論では学習者自らの「気づき」による F on F 促進の在り方を探った。本論の実践を踏まえ、「学習者自らの気づき」を本文図 1 に加えると次のようになる。



もっとも、本論では、「気づき」によってインプットが本当にインテイクにまで至るか否かは扱わない。あくまでも F on F がインテイクに役立つという前提に則って本研究は進められた。

⁷ *Ibid.*, p.26.

使したテキストもやはり難解であろう。比較的新しい作家によるものであり、かつ平易な語彙・文構造で書かれた英語はどうか。例として、Richard Brautiganの短編“The Old Bus” (1971)の英語を見てみよう。同作品の冒頭のみ引用する。

I do what everybody else does: I live in San Francisco. Sometimes I am forced by Mother Nature to take the bus. Yesterday was an example. I wanted to get some place beyond the duty of my legs, far out on Clay Street, so I waited for a bus.

It was not a hardship but a nice warm autumn day and fiercely clear. An old woman waited, too. Nothing unusual about that, as they say. She had a large purse and white gloves that fit her hands like the skins of vegetables.

A Chinese fellow came by on the back of a motorcycle. It startled me. I had just never thought about the Chinese riding motorcycles before. Sometimes reality is an awfully close fit like the vegetable skins on that old woman's hands.⁸ (下線筆者)

語彙も文構造も平易であり、特に難解であるとは思われない。しかし、1番目と2番目の下線部の言い回しや、3番目と4番目の下線部における比喩表現は、少なくとも日本人英語学習者には分かりづらいことが予想される。こうしてみると、平易な語彙・文構造で書かれてはいるものの、“The Old Bus”も、その意味内容の「大部分」が「理解可能な」ものであるとは言い難い。

前段落では文学が難解になり得る諸要因に触れた。逆に、それら諸要因を取り除いた文学であれば、第二言語習得の教材として相応しいテキストになり得るのではあるまいか。満たすべき条件としては次のようなものが考えられる。

条件 (1) : 現在の英語に近い英語で書かれている。

条件 (2) : 語彙や文構造が平易である。

条件 (3) : 言い回しや比喩表現等が難解ではない。

これらの条件を備えた、「分かり易い」文学であれば、Input段階で意味内容の理解に学習者が困難を覚えることはないかもしれない。しかし、このような文学は自己否定の危険性も孕んでいる。つまり、意味理解がスムーズになればなるほ

⁸ Richard Brautigan, *Revenge of the Lawn* (Edinburgh: Canongate, 1997), p.53.

ど言語形式へ学習者の注意が向かなくなることが考えられる。それでは、「言語形式に焦点が当たり易い」という文学の利点をそもそも活かせなくなってしまう可能性がある⁹。

上記3条件を備えた文学テキストを用いながら、かつ文学の特性である言語形式にも焦点が当たるようにするにはどうすればよいか。本論としては、平易な文学テキストの原文とそのリトールド版を併用することを提言したい。上記3条件を満たすような平易な文学テキストの場合、それがたとえ原文であっても、学習者は意味内容の大部分を理解するであろう。また、原文よりもさらに平易な英語で書かれたリトールド版を介すことで、原文に触れただけでは見過ごしてしまうような言語形式にも気づくのではあるまいか。このことを検証するために本論は次の2つの研究課題を設定する。

研究課題1：Oscar Wildeの短編“The Happy Prince”のリトールド版が、その原文の言語形式の焦点化に寄与するケースはどれくらいあるか。

研究課題2：リトールド版が原文の言語形式の焦点化に寄与したとして、その焦点化は原文の読みにどのように影響するか。

課題1は、リトールド版が原文の言語形式への焦点化を誘発するのかどうかを、頻度の面から探ることを目的としている。極端な場合、焦点化が全くなされないケース、逆に頻繁になされるケースが想定される。課題2は焦点化がなされることを前提としている。リトールド版によって、学習者が原文の言語形式に焦点を当ててようになったとして、その焦点化は原文の読みに何らかの変化をもたらすのであろうか。

2 研究方法

上記研究課題に取り組むために調査を実施した。調査材料、調査協力者、調査手順について説明する。

2.1 調査材料

主に、調査で使用した3種類のテキストについて説明する。

⁹ 気づきにくい言語形式に対し、教師が学習者の注意を喚起するやり方も考えられよう。しかし、本論では、教師が出来るだけ介入しない状況下において、文学を教材として使用することを想定している。

2.1.1 文学テキストの原文

文学テキストの原文としては、Oscar Wildeの短編“The Happy Prince”を使用した¹⁰。本論第1章で、第二言語習得の教材に相応しい、「分かり易い」文学テキストの条件として：(1) 現在の英語に近い英語で書かれている；(2) 語彙や文構造が平易である；(3) 言い回しや比喻表現等が難解ではない、の3点を挙げた。本来ならば、これら3条件全てに、より厳密な規定が必要であろう。例えば、(1)の「現在の英語」とは何なのか、また、それに「近い」とはどの程度なのか等々。しかし、本論では上記3条件をより厳密に規定することはしない。多分に主観的な判断に基づくことは認めつつも、次に見る通り、本論では“The Happy Prince”の原文が上記3条件に「大体において」合致するものとみなしたい。

条件(1)に関し、“The Happy Prince”は今から約130年も前の1888年に発表されているものの、現在の読者にも十分に読み得る英語で書かれている。ひとつの根拠として、Baugh and Cable (1993)の*A History of the English Language*での「英語史」の扱いが挙げられる。同書は、‘Middle English’から後の英語を‘The Renaissance, 1500–1650’, ‘The Appeal to Authority, 1650–1800’, ‘The Nineteenth Century and After’と区分している¹¹。つまり、19世紀以降の英語は歴史的にはひとつくりにされている。この区分に属する“The Happy Prince”の英語は、決して古いわけではないということになろう。もうひとつの根拠として、Wildeの別の短編である“The Selfish Giant”の全編が、現行の平成25年度用高等学校英語教科書*Polestar: English Communication I* (数研出版)に、原文のまま掲載されているという事実も挙げられる¹²。同作品は、本論で扱う“The Happy Prince”と同程度の英語で書かれており、両作品間で英語の新しさ／古さをめぐって差はほとんど無い。

“The Selfish Giant”の原文が教科書に掲載されているという事実は、条件(2)「語彙や文構造が平易である」に“The Happy Prince”が合致することの根拠にもなっている。加えて、調査で扱った“The Happy Prince”の原文の最終部分(全体の約1/8)の語彙頻度レベルをJACET 8000の分析プログラムv8anで調べた結果からも、同作品が条件(2)を満たしていると言えよう(表1参照)。

¹⁰ Oscar Wilde *The Complete Short Stories*, ed. John Sloan (Oxford: Oxford UP, 2010), pp.71–78.

¹¹ Albert C. Baugh and Thomas Cable, *A History of the English Language* (NJ: Prentice Hall, 1993), pp.vii–ix.

¹² 本論で“The Selfish Giant”を取り上げなかったのは、(1) 同作品が逸脱的な表現を若干含んでいるため、(2) 適当なりトールド版が見つからなかったためである。(1)については、作品の最後に使用されている‘Who hath dared to wound thee?’と‘Who art thou?’という表現が該当する。

表1 “The Happy Prince” 原文の最終部分における語彙レベル分布¹³

level 1	2	3	4	5	6	7	8	over 8	固有名詞	合計
160 words	8	13	1	2	3	1	0	7	0	195 words
約82.051%	4.103	6.667	0.513	1.026	1.538	0.513	0	3.59	0	100%

総単語数195のうち、level 1～3に属する単語はそれぞれ160単語（総単語数の約82.051%）、8単語（同4.103%）、13単語（同6.667%）である。つまり、使用頻度トップ3000の語彙が全体の約92.821%を占めることになる。もっとも難しいlevel 8の語彙は使用されていないが、対象外の語（over 8）として、“dust-heap” “evermore” “foundry” “leaden” “overseer” がそれぞれ1回、“furnace” が2回使用されている。これら over 8の語彙を level 9とすると、1単語あたりの平均レベルは約1.626である。また、Flesch-Kincaid Reading Ease のスコアは82.8、Flesch-Kincaid Grade Level は5.5であった¹⁴。後述する本調査の協力者の英語力から、“The Happy Prince” は条件（2）を十分満たしていると判断した。

条件（3）「言い回しや比喩表現等が難解ではない」を満たしているかを筆者自身が分析したところ、強いて言えば“lead heart”と“leaden heart”が通常とは異なるコロケーションを持つと思われる（「心臓」という臓器が、「鉛」という金属で出来ていることから）。しかし、これらの表現も“The Happy Prince”が条件（3）を満たす妨げにはなるまい。

以上のように、“The Happy Prince”は、第二言語習得の教材に相応しい、「分かり易い」文学テキストの条件を満たしていると言える。ただし、実際の調査では、難しい（と筆者が判断した）計6単語には注が付けられた。それらの注と、調査で協力者が実際に読んだ箇所については下の表2の右側を参照されたい。

2.1.2 原文のリトールド版

Oscar Wilde の短編“The Happy Prince”の原文をより平易な英語に書き換えたりトールド版テキストとして、オックスフォード大学出版局から出されているドミノ・シリーズ中のもの（*Dominoes: The Happy Prince*）を使用した。同シリーズ中の本は英語の難易度によって計4レベルに分けられており、本論の

¹³ level 1には、使用頻度の高い順に1～1000位までの語が含まれている。以下 level 2～8まで、使用頻度の高い順に1000語ずつ分類されている。

¹⁴ Flesch-Kincaid Reading Ease のスコア82.8は‘Easy’に分類される（90-100: Very Easy, 80-89: Easy, 70-79: Fairly Easy, 60-69: Standard, 50-59: Fairly Difficult, 30-49: Difficult, 0-29: Very Confusing）。また、Flesch-Kincaid Grade Level はアメリカ合衆国の学年に対応しており、レベル5.5は小学校5～6年生レベル（10～12歳レベル）のことである。

“The Happy Prince” リトルド版はもっとも易しい Starter (250語レベル) に属している (詳しくは, www.oup.com/elt を参照)。調査で協力者が実際に読んだ箇所については下の表2の左側を参照されたい。なお, 同箇所の総単語数は190であり, 2.1.1で触れた原文の総単語数195とほぼ同じであった。総単語数をほぼ揃えたのは, 総単語数が著しく異なれば, リトルド版と原文との比較がそもそも不可能になることを危惧したためである。

2.1.3 高等学校英語教科書

調査では, 原文もリトルド版も “The Happy Prince” の最後の約1/8のみを扱った。残り7/8のあらすじを調査協力者に把握してもらう目的で, 平成25年度用高等学校英語教科書 *New Stream: English Communication I* (増進堂) も扱った。同教科書の pp.137-42に, “The Happy Prince” のあらすじが “Optional Reading 2” として掲載されている。本来は, 調査で協力者が実際に読んだ箇所を引用すべきであろうが, 紙幅の都合上割愛する。

2.2 調査協力者

調査協力者は10名の日本人英語学習者である。全員が, 同一の大学・学部 (教育学部)・講座 (英語教育系講座) に所属する大学4年生であり, 英語教員になるための授業 (英語文学関連の授業も含む) を主に受講してきた。調査の直前にアンケートを取り, (1) 英語資格試験での成績と (2) “The Happy Prince” の認知度を調べた。(1) については, 全員が TOEIC を受験したことがあり, 平均点は826.5点, 最高点は935点, 最低点は645点である。“The Happy Prince” の原文を十分に理解出来る程度の英語力を有していると判断する。(2) については, 「全く知らなかった」が3名, 「友達にあらすじを教えてもらったことがある」が1名, 「翻訳や, 日本語で書かれた絵本で読んだことがある」が4名, 「高校生の時に読み換え版を読んだことがある気がする」が1名, 「大学入学後に原文をざっと読んだ」が1名であった。最後の1名に調査後に尋ねたところ, 「精読というレベルでは全くなく, 本当にざっと読んだ程度」ということであった。よって, 本調査に支障を来すほどには認知度は高くないと, 調査協力者10名全員に対して判断する。

2.3 調査手順

調査は, 平成26年7月30日 (水) に筆者が担当する英語文学関連の授業中に実施された。なお, その前週までに, 大学が定める授業数は満たしており, 調査に充てられた授業は学生の学習機会を奪うものではなかったと解釈している。また,

調査で得られた情報が調査以外の目的で使用されることはないこと、調査結果が成績等に影響することはないことが、口頭で説明された。調査手順は次の(1)～(6)の通り。調査中、辞書の使用を認めたものの、実際には誰も辞書を使うことはなかった。なお、各手順に要した大体の時間を手順ごとに括弧内に記しておく。

- (1) 調査概要として、以下の手順(2)～(6)を説明した(約2分)¹⁵。
- (2) 調査協力者の英語力と“The Happy Prince”の認知度に関する上記アンケート(2.2参照)を実施した(約3分)。
- (3) 高等学校英語教科書版“The Happy Prince”のコピー(以下、教科書コピー)を各自に配布し、あらすじを把握してもらう目的で、物語のはじめ7/8にあたる部分(教科書pp.137-41)を黙読してもらった(約5分)。
- (4) あらすじを把握したかどうかを確かめるために、教科書に掲載されているQuestionを計6問解いてもらい、解答を教科書コピーに直接書いてもらった¹⁶。その後、教科書コピーを回収した(約10分)。
- (5) A3用紙の右半分に原文の“The Happy Prince”の最後1/8を、左半分にリトールド版の最後1/8を印刷した紙(原文とリトールド版が分かれるように真ん中で折ったもの)を配布した(下の表2参照)。リトールド版を見ることなく、原文のみを黙読し、「面白いと感じたところには下線を、英語が難しいと感じたところには波線を引く」よう指示した(約10分)。
- (6) (5)の真ん中で折られたA3用紙を広げ、リトールド版の“The Happy Prince”の最後1/8を黙読してもらった。その後、リトールド版と原文とを読み比べながら、「リトールド版を読んだことで新たに気づいた点があれば原文に二重線を引き、出来ればコメントを書く」よう指示した(約10分)。A3用紙を回収し、調査終了。

3 結果

2.3の手順(6)にあるように、リトールド版を読むことで原文に新たな気づきが生じた場合には、原文に二重線を引いてもらった。調査参加者全10名分で、計

¹⁵ この際、今から読むものが「英国人作家のOscar Wildeの作品である」旨伝えた。よって、調査協力者は、自分たちが読んでいるものが「文学である」と認識しながら読んだことになる。

¹⁶ 回収した教科書コピーを調査後に筆者が見たところ、全員が全問正解していたことから、物語のあらすじは把握したもののみならず。

42箇所には二重線が引かれていた¹⁷。これらの箇所において、リトールド版との比較を通して、改めて原文に何らかの気づきが見出されたということになる。これら42箇所のうち、本論の研究対象から次のものは除外することにした。

- (a) 二重線が引かれてはいるものの、何のコメントも無かったもの(6箇所)。
- (b) コメントはあるものの、「リトールド版では省略されているが、原文にはある(あるいはその逆)」や「リトールド版では○×という表現が、原文では□△という表現になっている」といった単純な比較(12箇所)。
- (c) 本論の2つの研究課題が言語形式の焦点化に関わるものであることを踏まえ、言語形式に特に焦点が当てられていないコメントが書かれていた箇所(8箇所)。

(a) (b) (c) を除く残り16箇所を本論では分析対象とした。分析対象である16箇所がわかるように、原文に二重線を引いて通し番号(①～⑧)を付けたものを表2の右半分に載せた。なお、8箇所にしか二重線が引かれていないのは、同じ個所に複数名がコメントを書いたためである(例えば、⑦の“shall”には4名の調査協力者がコメントを書いた)。

表2 “The Happy Prince” のリトールド版と原文

	リトールド版 (190 words)	原文 (195 words)	
1	Because the statue isn't beautiful now,	So they pulled down the statue of the	1
2	they take it away and melt it in a big	Happy Prince. 'As he is no longer	2
3	furnace.	beautiful he is no longer useful,' said the	3
4	'Now we can make the lead from the	Art Professor at the University.	4
5	Happy Prince into a new statue,' says	Then they melted the statue in a	5
6	the Major. 'A statue of me!'	furnace ¹ , and the Mayor ² held a meeting	6
7	'Of me! Of me!' say the Town	of the Corporation ³ to decide what was	7
8	Councillors after him, and they don't	to be done with the metal. 'We must	8
9	stop all talking at the same time.	have another statue, of course,' he said,	9
10	'That's strange,' says one of the	'and it shall be a statue of ① <u>myself</u> .'	10
11	furnace workers. 'This lead heart with a	② 'Of <u>myself</u> ,' said each of the Town	11
12	crack in it doesn't melt. We must throw	Councillors ⁴ , and they ③ <u>quarrelled</u> .	12
13	it away.' So they throw the Happy	When I last heard of them they were	13
14	Prince's heart away on the town rubbish	quarrelling still.	14
15	heap. It falls next to the body of the little		
16	dead swallow.		

¹⁷ 同一の調査協力者が、原文中で複数回使用されている同一の表現に二重線を引いている場合は1箇所と数えた。例えば、原文中では2回“quarrel”が使われているが、これら2つの“quarrel”両方に二重線が引かれ、「なぜこれを書きかえでは talk にしたのか?」というコメントがあった場合、二重線は1箇所引かれたものとした。

	リトルド版 (190 words)	原文 (195 words)	
17	Soon after that, God speaks to one of	'What a strange thing!' said the overseer ⁵	15
18	his angels. 'Bring me the two most	of the workmen at the foundry ⁶ . 'This ④	16
19	important things in the city,' he says.	<u>broken</u> lead heart will not melt in the	17
20	The angel flies down to the rubbish heap.	furnace. We must throw it away.' So	18
21	It finds the lead heart with the crack in	they threw it on a dust-heap where the	19
22	it, and the dead swallow there and it	dead Swallow was also lying.	20
23	brings these two things back to God.	'Bring me the two most ⑤ <u>precious</u>	21
24	'You're right,' says God. 'Because	things in the city,' said God to one of His	22
25	now this little bird can sing happily in	Angels; and ⑥ <u>the Angel brought Him</u>	23
26	my garden forever — and the Happy	<u>the leaden heart and the dead bird.</u>	24
27	Prince can live in my city of gold for	'You have rightly chosen,' said God, 'for	25
28	ever, too.'	in my garden of Paradise this little bird ⑦	26
		<u>shall</u> sing for evermore, and in my city of	27
		gold ⑧ <u>the Happy Prince shall praise me.</u>	28
		注 1 炉 2 市長 3 市政機関 4 議員	
		5 監督者 6 鋳物工場	

通し番号 (1)～(16) を付けた全16コメントを四角括弧の中に、それらのコメントに対する筆者の分析を四角括弧の下に示す。これらのコメントでは、リトルド版の英語がきっかけとなって、原文の言語形式に何らかの焦点が当てられていると本論は考える。

①については1名の調査協力者がコメントしていた。

(1) “me” のほうがイメージしやすい。わかりやすい。

原文よりもリトルド版の言語形式の方が、意味内容が明確であるとの指摘であろう。ただし、実際には ‘me’ と ‘myself’ の間に意味上の差はほとんど無いと思われる¹⁸。

¹⁸ 代名詞と再帰代名詞の使い方の違いに関し、『新英文法辞典 改訂増補版』（大塚高信編、三省堂、1970年、p.887）には次のような説明がある。「たとえば、He looked about *him*（彼はあたりを見回した）のように、単なる人称代名詞を前置詞の目的語として使うことは、今日でも、きわめて普通のことである。Curme (*Syntax* p.100) によれば、文字通り場所を示す意味の場合には、I have no money with *me* / We see the stars above *us* / He shut the door behind *him*・・・のように単純形を用いるが、Look into *yourself* / He asked me about *myself* のような場所を示すというより比喩的な意味の場合は -self 形を使う。」「The Happy Prince」の問題の部分は「自分の姿に似せた銅像」という意味を持つ。よって、原文の ‘myself’ の方がリトルド版の ‘me’ よりも適切だと言える。また、『現代英文法講義』（安藤貞雄、開拓社、2005年、p.443）の「picture, story, photograph などの“絵画名詞”（picture pronoun）の補部になる前置詞句においても、再帰代名詞が生じる」という説明も、原文の ‘myself’ の適切さを支持するものである。ただ、日本における英語教育という観点からは、この差異は微細だと考える。

②については3名の調査協力者がコメントしていた。

(2) それぞれの議員が主張していた
(3) 'Of me! Of me!'のほうがみんなでそれぞれ主張しあっているのがよくわかる
(4) 原文では“Of myself” = “the Mayor” と思っていたが、書換を見るとそれぞれの議員が口々に言っているように思えた。

①と同じく、'myself'を含む表現へのコメントである。総じて、リトールド版の'me'の方が調査協力者にとって意味を取り易かったことがわかる。(1)の分析で触れた通り、実際には'me'と'myself'の間に意味上の差はほとんど無い。ただ、リトールド版の英語をきっかけに、原文の言語形式が焦点化され、その意味内容が改めて考えられたことが窺える。

③については3名の調査協力者がコメントしていた。

(5) 「なぜこれを書きかえでは talk にしたのか」
(6) 「talk と違い、口論している」
(7) 「書換に比べて人間のみにくさが感じられる」

リトールド版の'talk'と原文の'quarrel'の違いを意識したコメントである。コメント(6)と(7)は、リトールド版よりも原文の表現の方が意味内容を明確に伝えているという主張に取れる。

④については1人の調査協力者がコメントしていた。

(8) 「with a crack in it とわかりやすくいかえられている」
--

このコメントでは触れられていないものの、原文の'broken lead heart'の'broken'は、物理的に「割れた」という意味に加えて、精神的に「張り裂けた」という意味を持つと思われる。後者の意味が、リトールド版の'lead heart with a crack in it'では消され/薄められているのではあるまいか。その結果、'with a crack in it'の方が「わかりやすい」というコメントに至ったと推察される。(8)は、リトールド版と原文の言語形式の違い、それに付随する意味内容の違いに焦点を当てたコメントであると言えよう。

⑤については1名の調査協力者が次のようにコメントしていた。

(9) 「なぜ“precious”という語を使ったのか？」

リトールド版の'important'と原文の'precious'の違いを意識したコメントである。言語形式上の違いが意味内容に与える影響を考えた上でのコメントであると受け取れる。

⑥については1名の調査協力者が次のようにコメントしていた。

(10) 「原文ではすぐにわかったような書き方だが、書換では探してみつけたような物語になっている」

原文では、「街でもっとも貴重なものをふたつ持って来て欲しい」と神様は天使のひとりに言った」という文と、「天使は神様のもとに鉛の心臓と死んだ鳥を運んで来た」という文の間には'; and'しか無い。この'; and'にあたる部分に、リトールド版では、'The angel flies down to the rubbish heap. It finds the lead heart with the crack in it, and the dead swallow there'という表現が挿入されている。このために(10)のようにコメントしたのであろう。'; and'という言語形式と、'The angel flies down to the rubbish heap. It finds the lead heart with the crack in it, and the dead swallow there'という言語形式の違いから、異なる意味内容を読み取ろうとするコメントであると判断する。

⑦については4名の調査協力者が次のようにコメントしていた。

(11) 「なぜ shall を can にしたのか」

(12) 「なぜ shall ? God の意志のあらわれ?」

(13) 「God の言葉らしい」

(14) shall が相手への許可の意味を表すが、書換ではもっと簡単に“can”が使われている

この'shall'の意味は、少なくとも日本人英語学習者には分かりづらいと思われる。恐らく、'In the second and third persons, expressing the speaker's determination to bring about (or, with negative, to prevent) some action, event, or state of things in the future'(OED) という意味ではあるまいか。もっとも、この意味で正しいかどうかは本論では精査しない。重要なのは、上記4つのコメントが、リトールド版では'can'が使用されていることを踏まえた上で、原文の'shall'の意味を考えている点である。言語形式の違いと、それに付随する意味内容の違いに焦点を当てたコメントであると判断する。

⑧については2名の調査協力者が次のようにコメントしていた。

(15) 「なぜ“praise”するのか?」

(16) 「原文では抽象的なのに、書換では明示的に表わしてしまっている(深読みを制限してしまっている)。書換を足がかりに色々他のことも考えられる」

(15) は、リトールド版との比較を通じ、原文に'praise'が使われていることに改めて気づいた上でのコメントである。この場面での'praise'の使用が、調査協力者が考えるこの語の意味に照らすと、不自然に思われたのだろうか。言語形式

とその意味内容の関係が焦点化されていると言えよう。(16)は、リトールド版の‘the Happy Prince can live in my city of gold for ever’という表現が限定的な意味しか持たないのに対し、原文の‘the Happy Prince shall praise me’という表現が「深読み」を許容するとのコメントであろう。言語形式の違いによって意味内容の拡がりも違ってくるといふ指摘だと考える。興味深いのは、「書換を足がかりに」原文の表現に色々な意味を読み取ろうとしている点である。つまり、原文の言語形式とその意味内容への焦点化が、リトールド版を介してなされている点に着目したい。

以上、原文の言語形式に焦点が当てられていると判断された全16コメントを紹介するとともに、それらコメントの分析を試みた。これらのコメントと分析が、本論の研究課題2に対する研究結果の詳細である。この詳細をまとめ直したものを研究結果2として、また研究課題1に対して得られたものを研究結果1として提示する。

研究課題1：Oscar Wildeの短編“The Happy Prince”のリトールド版が、その原文の言語形式の焦点化に寄与するケースはどれくらいあるか。

研究結果1：総単語数190の“The Happy Prince”のリトールド版が、総単語数195の原文の言語形式の焦点化に寄与したケースは、調査協力者全10名で16ケースであった（1人あたり1.6ケース）。ケース別の人数は、0ケース：2名、1ケース：2名、2ケース：5名、4ケース：1名であった。

研究課題2：リトールド版が原文の言語形式の焦点化に寄与したとして、その焦点化は原文の読みにどのように影響するのか。

研究結果2：全16のコメントとそれらに対する分析から、大きく次の4点が結果として挙げられる。結果と併せて、その根拠となったコメント番号も示す（コメント(16)のみ、2つの結果に関わる）。

- ・リトールド版の表現がきっかけとなって、原文の言語形式に焦点が当てられたものの、原文の意味内容の考察までには至らなかった(5)(9)(11)。
- ・リトールド版の表現がきっかけとなって、原文の言語形式に焦点が当てられ、原文の意味内容が分かり易い(6)(7)、逆に分かり難いと感じた(1)(3)(4)(8)(16)。

- ・リトールド版の表現がきっかけとなって、原文の言語形式に焦点が当てられ、原文の意味内容を改めて考え直した (10) (12) (13) (14) (15)。
- ・リトールド版の表現がきっかけとなって、原文の言語形式に焦点が当てられ、原文の意味内容の拡がりを意識した (16)。

4 まとめ・教育的示唆と今後の課題

第二言語習得では、言語形式に焦点を当てること (F on F) は効果的であると考えられている。この考えに基づき、英語文学を日本の英語教育に取り入れる方法を本論では探った。本論では10名の英語学習者を対象に調査を行ったが、調査前に2つの問題があらかじめ想定された：(1) テキストが難解な原文の場合、学習者はF on Fの前提となる内容理解にそもそも支障を来す可能性がある；(2) 逆に、平易な原文の場合は、内容理解には問題が無くとも、言語形式への焦点化がなされない可能性がある。あらかじめ想定されたこれら2つの問題を両方とも解決するために、比較的平易な英語で書かれた原文と、そのリトールド版とを本論では併用することにした。平易な原文で意味理解をさせた上で、リトールド版との比較を通し、原文の言語形式への気づきを促すことをねらったわけである。実際の調査では、Oscar Wilde 作 “The Happy Prince” の原文と、そのリトールド版を使用した。調査結果から、リトールド版が原文の言語形式の焦点化に寄与し得ること、またその焦点化は原文の意味内容理解にも影響を与えることがわかった。以上が本論のまとめである。教育的示唆としては次の2点が挙げられる。

- (1) 第二言語習得におけるインプット段階を考慮して学習者にとって「理解可能な」英語文学の原文を教材として使用した場合、学習者自らによってはF on Fが十分になされないことがある。
- (2) (1)の問題への対処法として、(1)で使用した原文と、それよりもさらに平易な英語で書き換えられたテキストを学習者に比較させることが考えられる。

本論での研究がより高い説得性を持つためには、少なくとも次の4点が課題として挙げられる。(1) 今回の調査では、協力者全員が大学4年生であり、ある程度は英語文学の読解を経験してきた。大学に入学したばかりの1年生や高校生にも同様の結果が得られるかを検証する必要がある。(2) 本論での結果が偶然ではないことを示すために、他の文学テキストの原文とそのリトールド版を使って調査を重ねて行く必要もある。(3) 調査協力者のコメントの分析は筆者が単独で行っ

たが、本来ならば、客観性を高めるために他にも分析者を設けるべきであった。
(4) 学習者自らによる原文とその書き換え版の比較では、「気づき」に量的・質的な限界があることも事実である。その限界をどのように克服するかを、教師の介入の仕方等を含め、今後考えていく必要がある。

広島大学

*本論は、科研費助成事業の学術研究助成基金助成金（基盤研究（C））研究課題番号23520305「英語教育材料としての英文学の可能性を探る研究」（研究代表者：小野 章）の補助を受けて執筆された。

Focus on Form through a Comparison between an Original Literary Text and its Retold Version

Akira Ono

Lee and VanPatten (2003) depicts the processes of second language acquisition (SLA) as follows:

Input → Intake → Developing System → Output

Input refers to 'the language the learner is exposed to.' While the learner tries to take meaning out of the language, he/she also pays attention to form, that is, linguistic features. Intake happens when the features are stored in the learner's working memory. So, in the processes of SLA focus on form (F on F) helps the learner develop his/her interlanguage, which is described as 'System' in the above chart.

Literature might contribute to the development of the learner's interlanguage, because literary language tends to draw his/her attention to its form. There can, however, be a problem in the input. 'The most important characteristic of input' is that 'most of what the speaker (or writer) is saying' needs to be 'comprehensible.' (1)Literary language, if it is too difficult, might be beyond the learner's comprehension.

One option to solve the problem (1) is to use literature simple enough for the learner to read. There can, however, be another problem. (2)Literary language, if it is too easy, might not attract the learner's attention to its form.

In order to solve the problems (1) and (2), this paper proposes to combine an original literary text which is easy enough to read and its retold version which is even easier than the original. The text chosen in this paper is "The Happy Prince" by Oscar Wilde. Its retold version is published by Oxford University Press as *Dominoes: The Happy Prince*. This paper has two research questions:

RQ1: In how many cases does the retold version of "The Happy Prince" help the learner pay attention to form of the original text?

RQ2: Suppose the retold version of “The Happy Prince” helps the learner pay attention to form of the original text, how does it affect the learner’s reading of the original text?

To answer the two research questions I asked 10 Japanese university students to compare “The Happy Prince” and its retold version. 42 comments were submitted in total, and 16 of them were judged to be on form (answer to RQ1). Analysis of the 16 comments shows that focus on form triggered by the comparison affects the ways in which the students take the meaning of the original text (answer to RQ2).

Hiroshima University